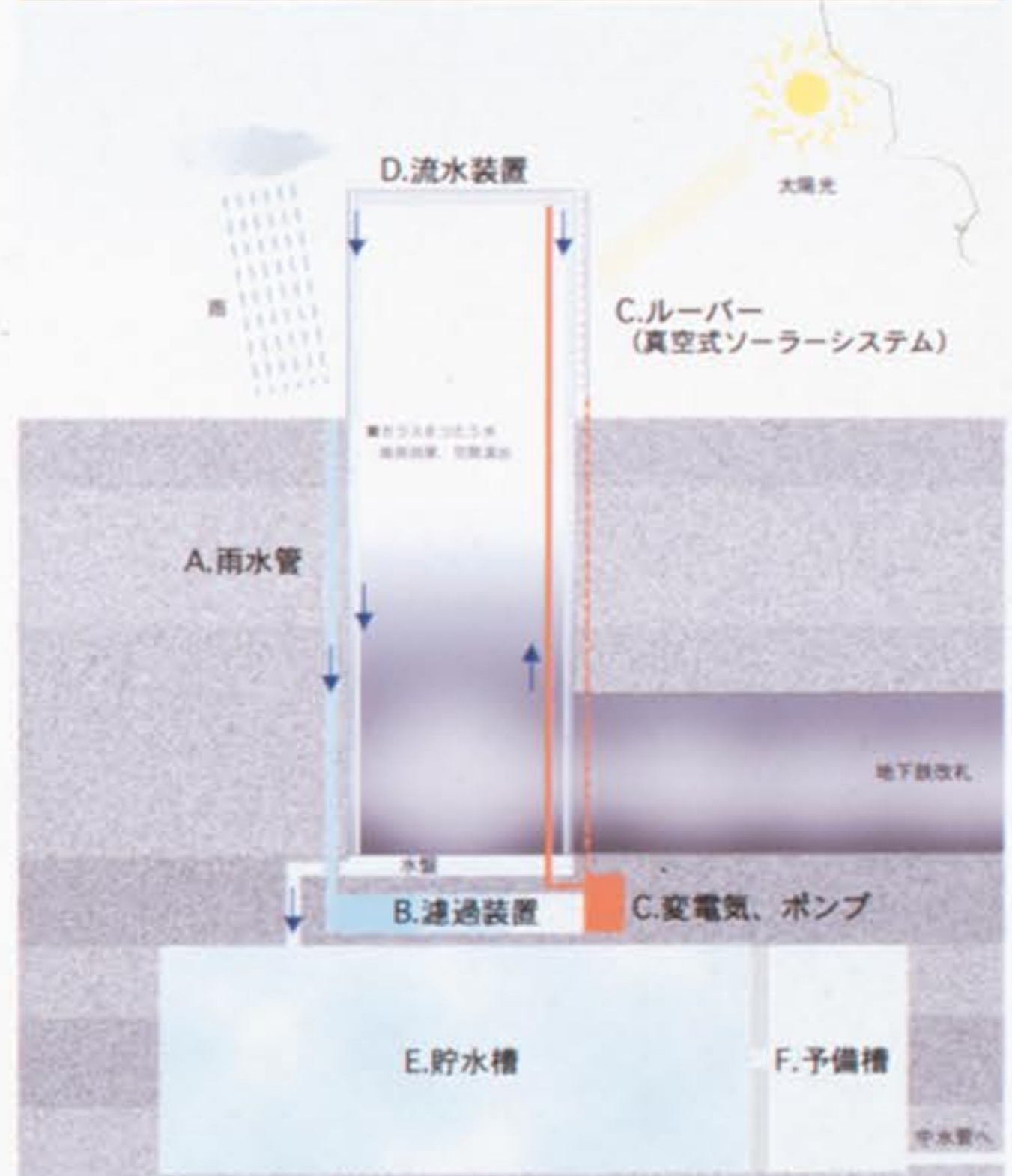


中水利用による効果

- 慢性的水不足の対策
- 都市利用水 (トイレの流し水、消化用水、冷却塔補給水、融雪用水、植物への散水)
- 災害時拠点
- 排水量の削減
- 下水道の負担の軽減
- 河川や湖の水質保全
- 水道代、下水道代を安く

空間演出と雨水・中水利用



- A. 雨は雨水管を通じて濾過槽に導かれる
- B. 濾過槽にて、濾過される
- C. 太陽熱を電力に変換し濾過水を流水装置までポンプアップする  
クリーンエネルギー、ランニングコスト0
- D. 流水装置からガラスへ水が流される。空間演出および、断熱効果
- E. ガラスをつたって水は水盤に落ち、貯水槽へ集められる
- F. 貯水槽がフルになると、予備槽にまわし、中水管へ送がす

以上の経過をもって、アトリウム内の空間演出と都市の中水利用を推進させる

今までのアトリウムは「自己完結的」に存在していたが、この提案では、都市に「分散配置された地下出入口」を「インフラタンク（中水タンク）型アトリウム」に置換し、都市レベルで活用され、機能するものとした。単独で機能するのではなく、都市全体に無数に分散して存在することで、大きな効果をもたらすアトリウム、都市という砂漠の中で人の心と身体を癒し、都市にも潤いを与えるオアシスとなる。

- 01 点として存在する既存アトリウム  
アトリウムは建築に都市を内包させ、快適な空間を利用者に提供している。しかし、現在あるアトリウムは「内部空間の演出に始まり、内部空間の演出に終わる」といってもよい程、目的を見失いつつある。都市レベルで見れば、機能的貢献は少なく、独立した「点」として存在するだけで、線にも面にもならず自己完結的な機能として存在する。
- 02 アトリウム化された地下空間出入口  
都市の中で著しくネットワーク化される地下街、地下鉄。このネットワーク化された空間の出入口は、都市の空所に顔をだしているが、都市景観上、美しく計画されていない。そのネットワーク上にある、地下空間出入口を「インフラタンク（中水タンク）型アトリウム」に置換して分散配置させていき、相互関係のもと機能させ、地上景観、地下景観ともに魅力的に変えてゆく。
- 03 小さなダム、中水利用の推進  
近年、夏になると東京はしばしば、渇水状態に陥る。利根川上流に新たなダムをつくる余地はないといわれている中、慢性的な水不足を回避するため、雨水の積極利用が有効だといえる。雨水を貯めるこのアトリウムは小さなダムとして都市内に分布し、インフラとして機能する。都市の中水整備を推進させ、トイレの流し水、消化用水、冷却塔補給水、融雪用水、植物への散水など、様々な用途で都市内で活用され、災害時には拠点ともなりうる。中水の利用は排水量が少なくなり、下水道の負担が減るとともに、河川や湖の水質保全にも役立つ。
- 04 水による空間演出とその利用  
地下と地上を結ぶ自然光に溢れたガラスの箱の内側を水が流れ落ち、水盤に伝う。流れる水は、鉛直方向の連続感を感じさせる。人々はそのガラスと水の中をガラスの階段で昇降したり、留まったりする。この空間演出では雨水を集め、それを真空式ソーラーシステムで集めた太陽エネルギーでろ過、ポンプアップを行うため、ランニングコストは0であり、流水の吸は断熱効果をもたらす。

